



月刊 千葉労働

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号(動力車会館)
電話 (鉄電) 千葉 2935・2936 番
(公) 043 (222) 7207 番

No. 94.9.26 4067

世の中の4つの大問題

われわれは、第21回定期大会を迎えるにあたり、当面する課題について提起したい。

一二月ダイ改反 合闘争を突破口に反撃を!

今日の大合理化攻撃の背景には、「分割・民営化体制」を本能的に見直し、再編成しようとする新たな攻撃が、本格的に始まるようになっている。われわれはこれを真正面から見据え、一二月ダイ改をめぐる攻防を突破口に反撃に打って出なければならぬ。それが第一に課題と言え

噴き出す分割・民営化体制の矛盾!

「分割・民営化体制」見直しの攻撃の背景には、その矛盾があらゆる面から噴き出し、分割・民営化の失敗を政府自ら認めざるを得ない現状がある。

土地を売り尽くし、東日本の株式売却によっても、清算事業団が抱える累積債務は全く減らない。それどころか、この三月末決算で、貨物・北海道が赤字に転落した。九州・四国も時間の問題である。またJR本州三社が抱える長期債務も、当初の四兆四千億円から一兆三千億円に膨れ上がり、債務の合計は三八兆円にのぼる。

そればかりか、(1)より大きな問題としては、分割・民営化を正当化する「鉄道斜陽論」「貨

物安楽死論」などという前提議論そのものの破産、(2)レールを持たない鉄道会社・貨物会社に構造的矛盾が集中していること、(3)運転阻害事故が増加するなど安全性を解体していること、(4)深刻な経営危機の第三セクター

鉄道、(5)国鉄労働運動解体に失敗し、未曾有の不当労働行為問題が未だ「違法企業JR」を告発し続けていること、(6)それ故に「革マル問題」に象徴される異常な労務政策、(7)新採をストップし、五〇才以上の労働者を根こそぎ首にする強権的手法によつてJRを発足させた結果、今後一〇年間で労働者半数以上が、「原則出向」年令に達し、業務運営自体に支障しかねない年令構成の矛盾がいよいよのしかかろうとしていること、(8)この事態を乗り切るため、ひたすら無謀な合理化・要員削減を強行し続けていること、またその結果、膨大な現職死亡・業務上死亡者が生み出されていることなど、あらゆる面から矛盾を噴き出させている。

破綻で迎える「一〇年目の総括評価」

こうした状況のなかでJRは、分割・民営化一〇年を迎えようとしている。八九年の閣議決定では、清算事業団の長期処理の期限について、九七年度中に結論をだすこととなっている。また、JR各社の固定資産税と都市計画税を半額にするという軽

減措置が一〇年間で期限がきれることになる。こうした背景のもと、運輸省や当局によつて「一〇年目の総括評価」という問題が一斉に主張されはじめている。

つまり二年半後には、分割・民営化の責任が、国会で議論され、否応なく一斉に表面化せざるを得ない。とくに累積債務問題は、「国民負担」と表裏一体の問題であり、国鉄分割・民営化の失敗が全国的議論にならざるを得ない。

運輸省やJR当局は、こうした事態を目前にして、これを糊塗するため、経営形態の再度の変更を含む、分割・民営化体制の抜本的見直しを開始しようとしている。

また、さらに大きな背景として、深刻な危機と激動の渦中に突入した内外の政治・経済状況に規定されて、鉄道交通政策自体がより反動的な転換を迫られているのである。九一年運輸政策審議会答申で出された「鉄道復権論」の焦点は、対外的には、アジアの勢力圏化をにらんだ対外侵出型の鉄道政策への転換であり、国内的には、「有事」に即応出来る鉄道輸送体制の再建という内容である。

われわれは、こうした敵の意図、攻撃の背景に踏まえ、一二月ダイ改闘争を皮切りに、分割・民営化見直しによる大合理化攻撃と対決しなければならぬ。

「全国にはばたこう」方針をさらに強固なものに!

そうした情勢と連動し、清算事業団闘争に対する新たな闘争解体攻撃が激化している。

「大失業時代」を前にして、国鉄労働者が一〇年に及ぶ国家をあげた攻撃に屈することなく、解雇撤回の旗を高々と掲げて闘いぬいていることは、支配階級にとつて大変な恐怖となっている。であるからこそ、国鉄労働運動解体の攻撃が激化しているのである。

闘う労働運動の新しい潮流を!

また、社会党の路線転換、連合の屈服状況を考え合わせると、ますますその存在が輝いてくることは明らかである。

動力千葉は、昨年来「全国にはばたこう」方針のもと、全国三六箇所、県内七箇所の国鉄集會を開催してきた。そしてその集大成として「闘う労働運動の新しい潮流を目指す九・一八労働者集會」を成功をかちとつた。第二の課題は、「さらに労働者の利益を代表する労働者のため、闘う労働運動を大きな勢力とするために全力を傾注しよう!」ということである。

第二一回定期大会において、この二大課題を討議し、大きなうねりを創りだそう!